

美術館と学校教育の連携～子ども学芸員の取組～

野村 宏毅

はじめに

美術館の業務は「収集と展示」「管理と保存」「調査と研究」「教育普及」である。教育普及は展覧会と関連づけた活動を推進して、展覧会事業の周知及び深化を目指すこと、社会教育施設としての事業を進め、地域や教育機関と連携した誘客システムの構築をはかること、制作に親しむ企画を実施し、もの作りの楽しさを味わいながら、美術を愛好する心情を養うことなどが目標である。そのために日常の解説はもちろんのこと、出張ミュージアムを始め、出前講座やワークショップなどの活動を実施している。

新学習指導要領に美術館や博物館との連携の重要性が記載された。今まで以上に学校との連携を進めなくてはならない。そのような状況をふまえて当館は学芸員が学校に出向き鑑賞授業を行ったり、児童が美術館で作品鑑賞の成果を一般客に披露する「子ども学芸員」を進めてきた。

以下、取組の概要とその成果、課題を紹介する。

1 「子ども学芸員」実施経過

(1) 第1期子ども学芸員(2010年度)

11月15日 「オリエンテーション 常設展の紹介」

会場：上組小学校図書館

常設展「近代美術館の名品」についてその展覧会の意図や主な作品の紹介などを行った。

12月6日～17日 「子どもが選んだ名品～レプリカ展～」

会場：上組小学校こだま美術館

常設展出品リストの中から子どもたちが選んだ作品のレプリカを上組小内にある「こだま美術館」に展示し、全校児童及び学校を訪れた地域の人に鑑賞してもらった。

12月15日 「学芸員に挑戦!～子どもが選んだ名品展」

会場：こだま美術館

常設展出品リストの中から子どもたちが選んだ作品のレプリカを子どもたちがお互いに紹介し合った。その時の内容や解説の様子を近美学芸員が参観し、必要事項を指導した。

1月9日 「学芸員に挑戦!～子どもが選んだ名品展」

会場：近代美術館常設展示室

(2) 第2期子ども学芸員(2011年度)

4月27日 「オリエンテーション 作品紹介」

近代美術館や学芸員の業務、主な所蔵作品の解説を学芸員が上組小を訪問して行った。

6月22日 「宮内地区公開授業 いわさ



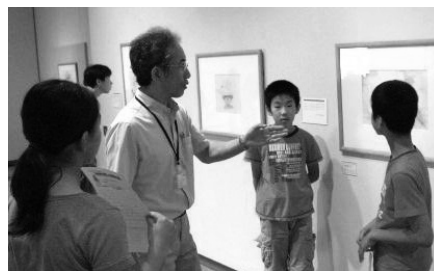
小学校での指導 6月22日

きちひろを語ろう」

子ども学芸員担当児童が他の児童に、きちひろの作品を屋台方式で解説。近代美術館学芸員が解説の仕方をギャラリートークに参加しながら指導した。本やインターネットで調べたことを発表する解説でなく、絵を見て感じた自分の考えたことなどを交えての解説も見られるようになった。

7月26日 「第1回子ども学芸員」

上組小学校の児童が一般のお客に向けて今まで準備してきた解説を披露した。近代美術館学芸員で適宜巡回し、20分の持ち時間を2回実施した後、立ち位置の確認、お客との距離、文節を意識した話の速度などを指導した。



展示会場でのリハーサル後、講評 7月26日

8月5日 「第2回子ども学芸員」

(関東甲信越静地区造形教育研究大会 新潟大会)

解説の対象になったいわさきちひろ作品を3名1グループで担当した。対象作品は第1回子ども学芸員と同じ作品を担当させた。

7月26日の反省点をふまえて、話の速度や立ち位置などに留意するとともに、鑑賞者からも感想を引き出すことを課題として実施した。鑑賞者との会話も少しではあるがスムーズになり、鑑賞者との適正な距離や視線を妨げない位置取りなどを意識したり、自分たちの見方への賛否を聞くなど、鑑賞者の考えを引き出すとするグループもあった。



自分たちの作成したキャプションを貼り付ける 8月5日



観覧者を前に説明をする子どもたち 8月5日

2 美術館としてのスタンス

指導する小学校側の立場としては、自分の感じたことを中心にして解説することを重視していた。とかく子どもたちは「知識としての解説」に偏りがちで、時代背景、素材、構図、色彩を中心に解説を進める傾向があった。確かに知識は必要であるが、それを土台として「自分として何を感じ取り」「どのような感動を伝えたいのか」がこのプロジェクトの目標であることを学校側と美術館側で共通の認識とし、子どもたちへの働きかけを進めた。

子どもたちは、作品集の解説などを基にして自分たちの解説を考えた。そこで、あらかじめ美術館側でチェックし、より分かりやすい解説になるように、また解説を考えた子どもが作品のどのような部分から、どんな感動を得たかを明らかに出来るように、また当日のお客さんがどのような人たちで、どのような思いをもつ



鑑賞者の視点を引きつける指の動き 8月5日

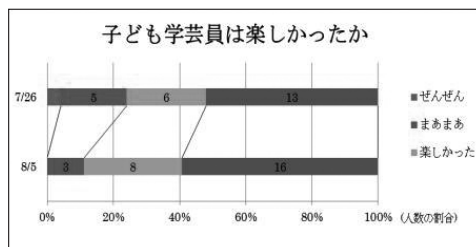
て展覧会に来ているのかを意識できるように、解説文の添削や解説リハーサルの指導を進めた。

解説のリハーサルを行う際には、それぞれの担当の子どもたちを指導を受ける解説者と、それを見ている鑑賞者に位置づけ、鑑賞者の表情なども意識するように指導を進めた。

また、絵の解説をするときに、見る人の位置や人数に合わせて立ち位置を変えたり、注目させたい部分を紹介する時に作品を指さし間近に見せたりするなど、より効果的に解説を進める基本的な動きも指導した。

3 成果と課題

今回の子ども学芸員に関わった6年生については、4月からはじめて実際の作品解説が8月上旬。約4ヶ月に渡るプロジェクトであったが、何回か学芸員が小学校を訪れたり、子どもたちが美術館に来館し、その都度作品や資料を前に

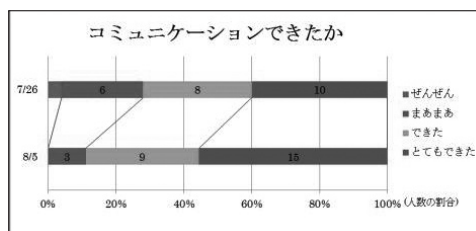


<資料> 子どもたちへのアンケート①

してお互いの考えを深める授業や鑑賞活動の工夫を行ってきた。一人一人の美術や絵に関する思いは程度の差はあれ、着実に深まり、美術館への親しみも湧いた。

成果のひとつは「子どもたちがコミュニケーションをとる場合には相手の思いを感じながら、話したり聞いたりすることの重要性を認識できたこと」である。すなわち作品に対する思いを解説者と鑑賞者が共有しながら作品解説を進めることができたことである。

初対面の人に絵を見せながら自分の調べたことや感想を述べる活動は小学生にはたいへん難しいことである。ところが実際大人に子どもたちが解説をすると、良く話を聞いてくれる。場合によっては自らの知識や考えも披露する。「親としての子を思う心」を意識させ、その心を共有しながら解説を進めさせたことと、いわさきちひろの作品であり、鑑賞者が作品に対してのそ



<資料> 子どもたちへのアンケート②

それぞれの思いをもって、作品鑑賞に臨んでいたため比較的スムーズに作品についての話題を発展させることが出来たと思う。

来館者の感想

ただ絵を見ているよりも、このように子どもたちから解説をもらうと、とても楽しく絵を見ることができました。お子さんの目と大人の目は、まるっきりちがうことを感じ、子どもたちの感性に驚きました。

このように鑑賞者がどのような思いをもって展覧会を訪れているのかにも配慮しながら、解説を進めることは美術館側にもたいへん重要であることを再認識できた。

これからも解説者と鑑賞者のお互いの交流の中でそれぞれの感想を出し合うことにより、より深い鑑賞を目指していきたい。



子ども学芸員を終えて、学芸員からの講評 8月5日

今回の「子ども学芸員」を美術館で行うために、上組小学校の担当者は何回も展示会場に足を運んだり、担当学芸員と打ち合わせをもった。今回のように造形教育に熱心でかつ能力の高い教員でも、美術館に通い本物を目にしてその感動を子どもたちに伝えていくことはかなり骨の折れることである。

しかし、「子ども学芸員」の取組を通して、教科書や資料集の画像では伝わらない本物の魅力を子どもたちに伝えていくことが出来ただけでなく、美術館のもつ教育の場としての有用性について、教師に気づかせたことが「子ども学芸員」のもう一つの成果であったと思う。

このように学校と美術館が連携し、より多くの学校が美術館の教育資源を活用できるように学校への働きかけを進めていきたいと思う。

余暇の多様化、入館者数の先細りや入館者の高齢化、予算の縮減など美術館を取り巻く環境は厳しい。しかし学校教育をはじめとした人間教育に美術は必要不可欠である。より多くの人々が美術に親しみ、余暇を過ごす学びの生活スタイルを地域に定着させたいものである。

(新潟県立近代美術館 学芸課長代理)

Connecting Museums and School Education –Child Curators–

NOMURA Hiroki

1. Opening

This year, The Niigata Prefectural Museum of Modern Art continued its program of “child curators” who explain works of art to general museum visitors as an educational activity.

2. Progress of the “child curators”

June 22: Miyauchi Area Open Class Talking about IWASAKI Chihiro

A curator from The Niigata Prefectural Museum of Modern Art provided guidance to child curators about explaining works of art. They were instructed not to just present about their research, but also the importance of including such things as how they felt when looking at the pictures.

July 26: 1st Child Curators Program

Students from Kamigumi Elementary School explained works of art to general visitors.

August 5: 2nd Child Curators Program (Niigata Conference of the Kantokoshinetsusei Area Art Education Research Conference)

This time, it was conducted with the agenda of drawing out impressions from the viewers. Some groups also drew thoughts out of the viewers by doing things such as asking if they agreed or disagreed with their points of view.

3. Accomplishments and challenges

One accomplishment was that the children were able to recognize the importance of empathizing with the thoughts and feelings of others when listening and talking.

Another accomplishment was that the teachers were made aware that wonderful art education can be done at art museums.

(Educator, The Niigata Prefectural Museum of Modern Art)